

審査の結果の要旨

氏名 坂口 由佳

自傷行為は青少年期における深刻な問題行動であり、学校現場でも対応に苦慮している。直接対応にあたるのは担任教師や養護教諭、スクール・カウンセラー (SC) 等だが、マニュアルもなく、それぞれが困難感を抱きがちである。本論文では、自傷行為とそれに対応する学校の現状を教職員と自傷体験者双方の視点から描き出し、より望ましい対応の形を構想しようとした。全体は4部構成で、6つの研究を含む全10章から成り立っている。

第1部は「自傷行為をとりまく現状と課題」であり、先行研究の整理を行って(1章)、中高生の自傷行為とその対応に焦点を当てた研究を行うことの意義が論じられ(2章)、最後に本研究の目的が明示された(3章)。第2部は「自傷行為をする生徒に対して学校ではどのような対応が行われているか」と題されている。研究1では300人以上の教員・養護教諭・SCを対象に質問紙調査が行われ、対応の現状と背景が明らかにされた(4章)。研究2では自傷行為対応の経験をもつ教師7名を対象に半構造化インタビューを行い、グラウンデッドセオリーの方法で分析した結果、他の生徒と対等に扱うことに留意しつつも、声かけなどの関係作りを密に行うよう心がけていること、教員間の連携の必要性が意識されていること等が見いだされた(5章)。研究3では、より直接に生徒と向き合うことが多い養護教諭11名へのインタビューを行った。そこからは、養護教員は教師間の連携における中心的役割を演じているものの、期待通りにいかないジレンマを感じる傾向が認められた(6章)。第3部は「自傷行為をする生徒にとって学校での対応はどのように体験されているか」というタイトルである。研究4では、自傷行為体験者のブログでの記述をもとに、その体験特徴と学校の対応の過程を仮説的なモデルとして呈示した。そこでは、生徒が自傷行為から離れる方向とさらなる孤立状態に陥る方向が同定され、それぞれの方向と関連する条件が取り出された(7章)。研究5と6は、研究4の対象者から1名ずつの協力者を選んで行われたインタビューによる事例研究であり、ブログの記述内容との比較分析がなされた。結果として、時間の経過とオーディエンスの変化が体験の語りにもたらしうるかが分析され、変化が見られる部分と見られない部分の特定などが試みられた(8、9章)。第4部は、「総括」と題され、総合考察を行う10章からなっている。ここでは、以上6つの研究をまとめて、自傷行為に向き合う学校の対応のあり方について、今回の研究の実践的な含意が抽出された。特に、自傷を行った生徒と学校の関係作りの面の重要性と、そのためのチーム対応と教職員間の情報共有・連携、さらには要となる養護教員をサポートするシステム作りの重要性が指摘された。

自傷行為など問題行動への対応として教員間の連携はかねてより言われてきたことだが、本論文は、なかなかアクセスしにくい自傷行為体験者の声も知見の重要なリソースとしながら、今後のSCの役割も展望しつつ、具体的な形で学校での対応の可能性を呈示した点で、博士(教育学)の学位を授与するに相応しい水準にあるものと判断された。